

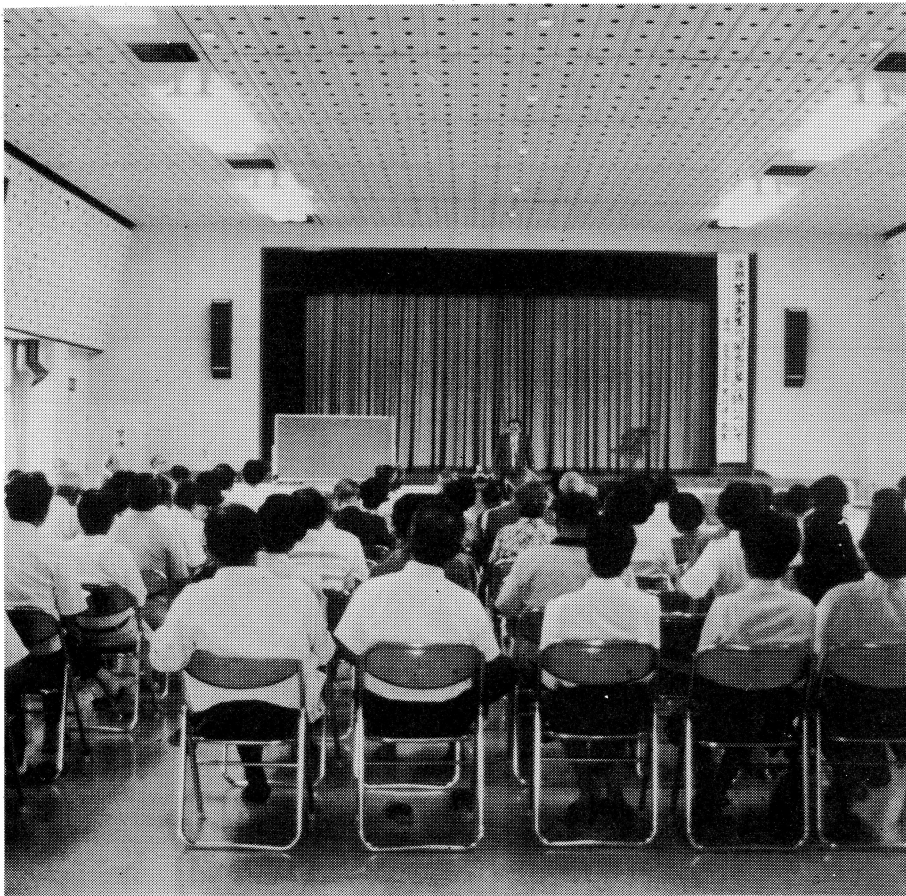
菅茶山  
顕彰会  
会報

第 3 号

発行

菅茶山先生  
遺芳顕彰会

1990年6月10日



## 菅茶山先生

## 「開元の琴の歌」について

黒川 洋 一

江戸時代、ことにこの時代の後期は、わが国における漢詩の全盛期でありました。文化・文政年間、それは茶山先生の晩年にあたりますが、そのころの人に菊池五山という人がおります。昭和初期に活躍いたしました菊池寛という小説家のご先祖にあたる人であります。その五山に『五山堂詩話』という本があります。この本は当時の詩人を取り上げまして、一人につき一首ないし二首の作品を載せ、その詩と人についての紹介を行ったものであります。その本を見ますと、実に五百三十人の詩人が紹介されております。その数はその当時の詩人の一部分でありましょうけれども、恐ろしい数といわなければなりません。驚くことはその数ばかりではありません。それらの詩人たちが、江戸とか大阪といった大都市に集中しているのではなく、全国にわたって広く散らばっていることです。さながら秋の夜空に輝く無数の星を連想させます。壮観というほかはありません。そうした多くの詩人のなかにあって、一きわ輝きを放っているのは、菅茶山先生であります。先生は江戸時代を代表する漢詩人であるだけでなく、ひょっとするとわが国が生んだ詩人のなかでも、もっともすぐれた人であったといっても間違いではなからうと、わたしは思っております。

茶山先生が残されました詩の数は、二千数百首ほどあります。そのうちで「お前はどの詩が一番すばらしいと思うか」といわれまますならば、わたしはためらうことなく、「開元の琴の歌」という詩